

水辺に対する住民の意識からの都市における水辺の効用について —六郷用水の移り変わり—

Urban riverfront usage from the perspective of residents
: the transition of the Rokugo water reserve

研究第二部 主任研究員 金 森 功
研究第二部 部 長 木 村 吉 晴

東京都内を流れる河川・水路は、昭和30～40年代の高度成長期から徐々に開発が進み、河川や水路が埋め立てられ、道路や宅地に姿を変えてきた。しかし近年では、廃川となった河川や水路を復活させようという動きが一部であり、実際に水の流れを取り戻しているところもある。

このような動きの背景にあるものは何か。どのような経緯で埋め立てられ、そして復活したのか。沿川住民の生活の中での河川の役割はどのように変化してきたのかについて、流れが現存している区間、消失した区間、復活した区間が混在して見られる六郷用水について、沿川住民にヒアリング調査を行い整理したものである。

キーワード：河川環境 水辺の歴史 用水路

Rivers and other waterways running through Tokyo were filled in and replaced by roads and buildings as development gathered momentum in Japan during two decades of high economic growth that began around 1960. But recently some of this water has begun to flow again, in part because of a movement to reinstate abandoned rivers and waterways. The question is what is driving this trend, and what circumstances led to filling in the channels with land and then later restoring the flow of water in them. This study focused on a body of water in the Tokyo area known as the Rokugo water reserve, which consists of segments where water has always flowed, where the flow has ceased, and where it has been restored. The report presents the findings of interviews with riverfront residents in which they discussed the Rokugo reserve and how the role of rivers in the lives of people who live along them has changed.

Key words : river environment, riverfront history, channels

1. はじめに

東京都内を流れる河川・水路の流水は、江戸時代から、都内の水田への用水や洗濯などの生活用水に利用されてきたが、昭和30~40年代の高度成長期の市街化の進展にともない、多くの河川や水路が埋め立てられ、道路化されたり、暗渠化されたりしてきた。しかし近年では、歴史的な意義あるいは地域住民の憩いの場としてなどから、廃川となった河川や水路を復元させようという動きがあり、河川や水路が復元されているところもある。

本研究は河川及び水路の廃止に対する地域住民の意識、あるいは水路を復元しようとした地域住民の動機などを通じて、河川・水路が都市環境として地域の住民に与えた影響を把握することを目的として、東京都世田谷区、大田区を流れていた六郷用水を対象とし、ヒヤリング調査や文献等をもとに、用水の廃止・復元に対する住民の意識を把握し、考察するものである。

2. 調査対象河川について

東京都内の河川・水路はかつて運河や水路と結んで舟運の輸送路として、また水田の用水路等として利用してきた。しかし、第2次世界大戦後、戦災復興に向けて市街地の整備を進めるための瓦礫の処理（浜町川、外濠など）、首都高速道路の建設のための空間としての利用（汐留川、京橋川、築地川など）、都市化に伴う生活廃水処理のための下水道化や水田の減少に伴う利用目的の消失などの社会情勢の変化等に伴い廃川・廃止してきた。

(図-1 河川・水路の変遷)

しかしながら、昭和40年代の後半から人々が水辺に対する価値に気づきだし、昭和50年代には東京都の清流復活事業により、野火止用水などの復活が行われてきた。

本調査では、河川・水路の廃川・廃止や復元に対する地域住民の意識などの把握を目的とすることから、同一の河川・水路において、廃川・廃止さらには復元された区間があるも

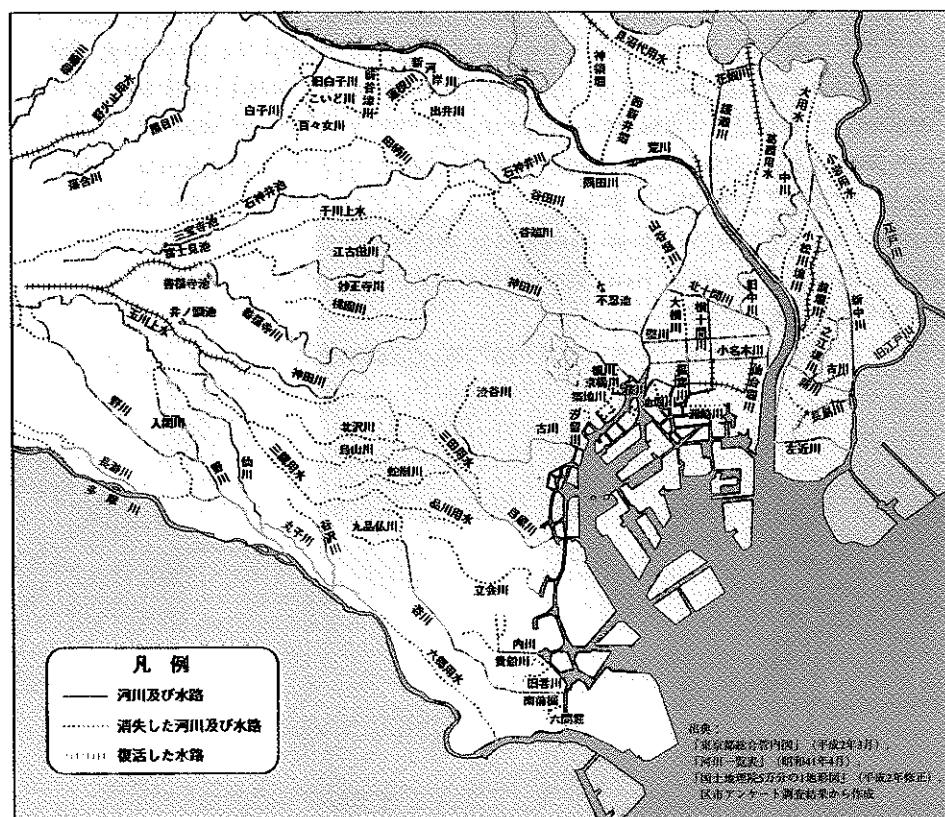


図-1 河川・水路の変遷（出典 東京都水辺環境保全計画 平成5年）

Fig.1 Changes in Rivers and Waterways (Courtesy of the Tokyo Waterfront Environmental Preservation Project, 1993)

のが望ましく、東京都狛江市から世田谷区、大田区を流れる六郷用水を対象としてヒヤリング調査を行うこととする。

3. 六郷用水の概要

3-1. 六郷用水の成り立ちと沿川住民との係り

東京都狛江市で多摩川から取水し、世田谷・

大田区から東京湾に流れている用水で、慶長年間（1597年～1611年）に徳川家康の命により小泉次大夫（駿河国富士郡小泉郷生れ）によって開削され、次大夫堀とも呼ばれており、もともとは大田地区への農業用水供給が主であった。（総延長約24km 平均堀幅 2.1～4.5m）（図-2）

また、上流の沿川地域では用水の周辺など

表-1 廃止前の六郷用水の利用

Fig.1 Utilization of the Rokugo Reservoir Prior to the River's Disappearance

	狛江地区	喜多見地区	大田地区
農業用水としての利用	利用は少なかった。（大部分は通過用水）	同左（明治二年で水田面積の16%）	利用していた。（約1500ha）（のり養殖と田畠の兼業）
その他の利用	野菜などの洗い場、魚とり・水遊び	野菜などの洗い場（昭和30年頃迄）、魚とり（ドジョウ・ウナギ・鮒・鰐等）、水遊び（水深により初・中・上級に）、螢狩り（昭和28年頃迄）、風呂の水（大正末期迄）、飲み水（沸かしてお茶として）	魚とり・水遊び



図-2 六郷用水位置図

Fig.2 Location of the Rokugo Reservoir



写真－1 次大夫堀 [大田地区(鶴の木付近 昭和23年頃)]

Photo 1 Jidayubori Canal (near Unoki in the Ota area of Tokyo, 1948)

の一部を除いて農業用水としての利用はされていなかったが、用水を野菜などの洗い水、飲料水、風呂水などの生活用水としても利用され、さらにはこの用水で子供が魚取りや水遊びなども行っており、農業用水としての利用はあまりされていないものの、用水は日常生活と密着していた。

3-2 廃止の経緯と要因

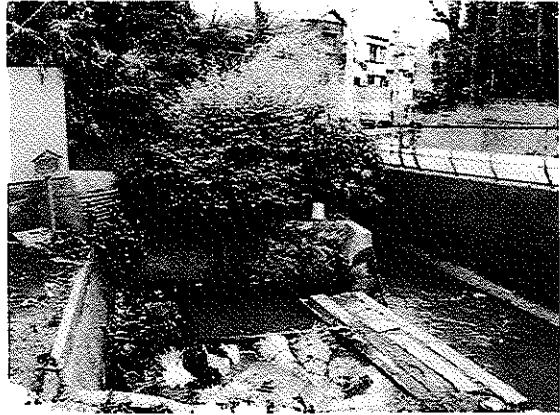
六郷用水沿川は、昭和20年代末から生活排水が流入するようになり、水質を悪化させていった。また、多摩川の小河内ダムの建設・砂利の採掘等により、多摩川の水位が次第に低下し、昭和30年代には水位は六郷用水の取り入れ口から、約3.5mの位置に低下した。



写真－3 大正時代の次大夫堀

{世田谷区鎌田付近(喜多見地区)の六郷用水}

Photo.3 Jidayubori Canal in the Taisho Period (1912-26) (Rokugo reservoir near Kamata in the Kitami area of Setagaya Ward, Tokyo)



写真－2 護摩堂(大田地区)の洗い場 (昭和40年頃)

Photo 2 Gomado Washing Area (Ota area of Tokyo, 1965)

らには周辺の農地の宅地化等により世田谷区や大田区において水田耕作が行われなくなつたことから、多摩川の堰を改修する財源が得られなくなったため、六郷用水へ用水が供給されなくなった。このため、用水の水が停滞したことと生活用水の流入により、水質が悪化し、水が腐り悪臭を放つようになり、また蚊が多く発生するようになり、用水周辺の生活環境に大きな影響を与えた。

一方、宅地化の進展、自動車交通の増加などに伴い道路整備が必要とされ、用水路も一部は排水路として利用し、また、一部は下水道として埋設し、上部は道路として利用できるように埋め立てられてきた。

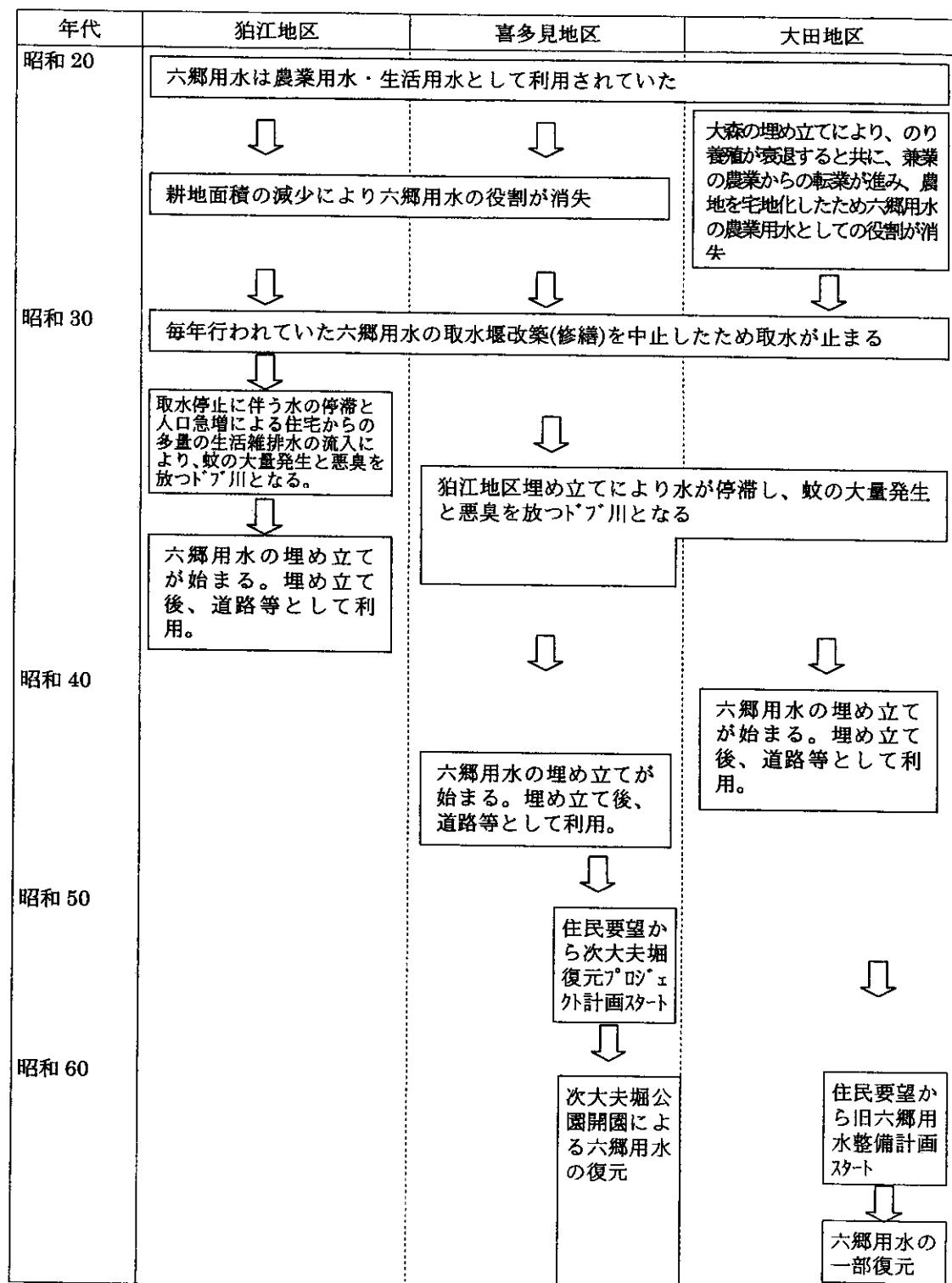


写真－4 同左現在の様子

Photo.4 Jidayubori Canal Today

表－2 六郷用水廃止の経緯

Table 2 The Circumstances Leading Up to the Rokugo Waterway's Disappearance



なお、六郷用水の喜多見地区よりやや下流にあたる地区では丸子川と名称が変わって、六郷用水が現在でも残っている。この地区は喜多見地区が埋め立てられるころにはまだ住宅がほとんどなく、悪臭などに対する苦情がなかったため、埋め立てられなかつたものと思われる。

3-3 復元の経緯

埋め立てられた六郷用水のうち、地元の要望などにより、世田谷区喜多見地区と大田区大田地区において埋め立てられた水路が復元されている。

喜多見地区における用水の復元は、昭和 50 年に沿川にある知行院の住職のご子息が学習院中等科を受験した際に、試験問題として六郷用水の歴史について出題され、その話を聞いた住民が、「入試問題にまで登場するのならば、地元としてもせめて緑道にして、流跡ぐらいは残しておこう。」と思い立ったことがきっかけとなった。その後地元では、用水沿い

の自治会が中心となり、署名を集め、昭和 51 年 9 月に世田谷区に請願し、その結果、大規模な公園づくりの中で、六郷用水が復元されることになった。

大田地区においては、地元として集い憩うことができる場の整備を大田区に要望したことを受け、区の歴史を語るうえで欠くことのできない六郷用水をもう一度見つめ直し、潤いある都市空間を再生するために、「イメージネットワークの整備～旧六郷用水コース整備計画」を昭和 63 年に策定し、地域住民にやすらぎと憩いをあたえる場として用水路の復元などを行っている。

これら用水の復元においては、地域の歴史的なものを残していくためといったことが主な動機であり、生活環境の改善といった点では、大田区の住民から憩いの場の必要性が出されたものの、地域として用水の復元までは考えていなかつたものと思われる。



写真-5 次大夫堀公園に復元された水路
Photo 5 A Restored Canal in Jidayubori Park.



写真-6 大田地区に復元整備された水路
Photo 6 A Restored Canal in the Ota Area of Tokyo

4. 用水に対する住民の意識

4-1 ヒヤリング調査

六郷用水の廃止あるいは復元に対して、地元の住民がそのときに感じたことを把握するため、沿川地区のうち、狛江市（狛江地区）及び東京都世田谷区（喜多見地区）並びに大田区（大田地区）において、廃止以前から沿

川に居住していた者を対象として①廃止以前の状況、②廃止された当時の反響、③現在の評価などについてヒヤリングを行った。

なお、調査対象者は、地元の教育委員会から有識者を紹介して頂き、その方から旧六郷用水沿いに居住している方を紹介して頂いた。調査対象者の年齢は 50 歳台以上（大正末から昭和 10

年代生まれ)で、調査対象者数は、狛江地区では5人、北見地区では8人、大田地区では4人であった。

4-2 ヒヤリングによる住民意識

ヒヤリングで得られた住民の廃止などに対する意識について、①廃止に対する意識及び②復元に関する意識について整理する。

(1) 廃止時における意識

各地区において、六郷用水が農業用水として利用されている時期については、前述のとおり、日常生活に密着したものであったが、廃止し、埋め立てを行う時点においては、住民は六郷用水が廃止されることについて関心がなかったようである。ヒヤリングにおいては、「汚い川といったイメージが強く、悪臭もひどかったため、残してほしいという意識はほとんどなかった。」「ごみ捨て場となっており、蚊もかなり発生していた。」といった意見が出された。このように、廃止される直前の用水の状態が悪く、生活環境を改善するために、何らかの方策が望まれていた。この様な状況から、道路整備に対するニーズが高くなつており、廃止され、道路として整備されることが評価されていたことが伺われ、用水が埋め立てられることは仕方がないことで、廃止されても何も失つたものはなかつたとの意見が多かつた。

なお、廃止に対して、昔の風景や生活がなくなることへの寂しさなどから、水路を懐かしむ意見やきれいな水の復活を望んでいたといった意見もヒヤリングにおいて出された。

(2) 復元に関する意識

水路を復元したことに対する住民の意識として、ヒヤリングにおいては、喜多見地区で地域の歴史を伝えることができるとの意見があつたが、喜多見地区と大田地区の両地区において「水を見ると心が安らぐので、復元したことは良いことであった。」また「水辺に行くことにより、魚や鳥などを目にすることができますようになった。」との意見が出された。

さらに、水辺を訪れることにより多くの人のコミュニケーションが形成されていることなどの意見が出されている。

(3) 年代別の意識の相違

廃止後の意識について、狛江地区に用水の水がきれいだったころから居住している者と昭和30年代の宅地開発などの進展に伴い移り住んできた者とを比較すると、以前より居住している者は汚れた用水に替わって、道路などが整備されたことを評価している。一方で、先に述べたように、無くなつた景観を懐かしく思う意識も持ち合わせている。しかし、復元に対して、人工的なものを作つても、元の風景が戻らないことから反対する意見もあつた。

一方、昭和30年代に移り住んだ者では、移り住んだ時代の多摩川沿いの自然環境と湧水が出てくる泉がまだ存在していたころの狛江の自然環境を評価しており、そのような環境があつて、六郷用水の復元されるべきであると考えている。

(4) 水辺に対する意識

今回の六郷用水の廃止・復元に関するヒヤリングは、17人と少人数であったが、調査で得られた廃止等に関する意識から、都市内の河川や用水路が地域住民に与えている影響を考察すると、次のようなことが整理できる。

- 用水の水質が悪化することにより、水辺としての魅力が無くなり、人々は水辺(河川、用水路)を意識しなくなっている。また、水質が悪化したことにより、廃止されることがむしろ良いことであると思われている。
- 用水の復元は歴史的な意義を残すなどの観点からであり、生活環境を改善する観点から復元を望む要望は少なかつた。
- 復活した河川では、都市内を清流が流れていることにより、人の心を和ませる効果が大きい。また、人々が集まることによりコミュニケーションが生まれる。

このようなことから、都市化が進むにつれて、都市の中で自然が残っている水辺や、潤いのある水辺は、益々貴重な空間になってきたといえる。

これらから、河川や用水路の水質の悪化により、人々は水辺を意識しなくなっていたこと、また完全に復元できないにしても用水を復元することにより、地域住民の憩いの場として、また自然とのふれあいの場としてなど、都市における特別な空間として利用され、日常生活の質の向上に大きく寄与している。また、水辺に住民が集まることにより地域のコミュニティーの形成に大きく寄与することが明らかになった。

5. おわりに

本研究は河川の持つ「癒し」に関する研究の一環として、六郷用水を対象とし、用水の廃止に対する住民の意識についてヒヤリングを中心に把握し、考察をえたものである。

今回の調査では、調査対象が少ないとからこれだけですべてを断定することはできない。しかし、今回の調査において、小規模な河川でも地域に与える影響は大きく、癒し的な効果はあることが確認できた。また、そのためには水質が大きく影響を与えることも併せて確認することができた。

また、河川の持つ癒し効果などの効用を明らかにしていくためには、このような沿川住民の時間的な経過を踏まえたヒヤリング調査を重ねていくことが有効であることも明らかになった。

最後に本調査にあたりヒヤリングに協力していただいた、六郷用水沿線住民の皆様方及び建設省関東地方建設局京浜工事事務所にご協力・ご助言をいただき、深く感謝申し上げます。

＜参考文献＞

- 1) 六郷用水物語 大田区 平成3年
- 2) 狛江市広報 昭和27～平成2年
- 3) 世田谷区広報 昭和36～平成10年
- 4) 大田区広報 昭和57～平成2年
- 5) 東京都水辺環境保全計画 平成5年
- 6) 東京都清流復活全体計画 1989
- 7) 江戸の川東京の川 鈴木理生
- 8) 都市をめぐる水の話 紀谷文樹等
- 9) 小泉次大夫用水資料 世田谷区教育委員会 昭和63年
- 10) 東京の中小河川 東京都建設局 1976
- 11) 学習院初等科昭和50年入試問題
- 12) よみがえる水路 1978
- 13) 六郷用水の歴史を調べて 1975